

「今度来る地震」を正しく怖れ、
正しい対策をとりませんか。
そして防災対策から地域づくりへ…



若い世代に関心を持ってもらうために
地域で一番がんばらないといけない
のは30〜40歳代。インターネット世代
のこの人たちに、地域の自主防災会に
関心を持ってもらいたいと思いホーム
ページを立ち上げました。
わが町の震度・液状化危険度を知る
今、防災について発信されている情
報のほとんどは「地震が起きたら避難
所に避難しましょう」などの一般論。
でも私の住む池浦町では、地震で津波
や土砂崩れが起きるわけでもなく、緊
急避難が必要な状況にはなりにくい。
避難するよりも、まず自分の家をきち
んとしてから、外へ出て困っている人
を助けることが、住民の最初の活動に
なると思います。



ふか や すむ
● **深谷 進**さん(池浦町・45歳)

池浦町自主防災会の役員として作った
ホームページが第9回防災まちづくり
大賞ホームページ部門で消防庁長官賞
を受賞

このホームページで一番見てほしい
のは「わが町の震度・液状化危険度」
です。市ホームページの「震度・液状
化分布図」でも概略はわかりますが、
実際に自分の家がどこにあり、どの程
度の震度なのかかわかりにくい。本当
に必要なのは自分の住む家はどのな
かという具体的な情報なんです。
地震が起きても平気な環境づくり
地震のときには「野次馬が増えれば
いい」と思うんです。要は元気な人が
たくさんいることが大切なんです。
そして、地震に対する家での備えと
しては、家具の転倒防止が重要です。
自分が傷つかないのは当然のことです
が、後片付けをしないで済むようにす
ることに意味があります。災害時の人

手のマイナス要因は少しでも減らさな
ければなりません。防災はまず「自分
は地震が起きても平気だ」という環境
を作ることが大切です。
防災対策からの地域づくり
「家族を愛しているから防災に取り組
んでいる」という仲間がいます。その
思いが防犯やPTA活動につながり、
縦のつながりから高齢者に目を向ける
ことにつながる。防災対策を考えるこ
とが地域づくりにつながっていくんで
すね。町内会の活動が「本当に自分た
ちの利益になることをやっている」と
理解できれば、若い人も参加してくれ
るようになる。そうやって本当の意味
で地域が良くなっていくことを期待し
ています。

「いけうら防災ねっと」

⇒ <http://www.ai21.net/bousai/>

このホームページでは、自主防災会
の役割や日ごろの備え、東海地震や東
南海地震に関する情報、災害時に情報
を収集発信できる「防災・地域情報掲
示板」や災害発生時の窓口となる「災
害緊急情報」、気軽に防災知識を身に付
けられる「防災用語まめ知識」など、
幅広い情報を提供しています。

花ノ木古物セリ市跡

むかしむかし、この地に昭和の初めから昭和三十年頃まで、中古の家具・衣料品・身の回り品などを譲り（セリ）に掛ける市場がありました。セリは一番高い値を買った人に落ち（買え）ます。誰でも手数料をセリ人に払えば売ったり買ったりすることができました。

当時セリによく掛けられた物は、大正箱（木製のこすり）・古靴・自転車で、特に戦後（昭和二十年以降）は呉服などの古着が中心でしたが、漫画骨董品などのお宝もありました。

市はサンパチのイヂといわれ、八幡社の市のように3と8の日に開かれ、建物の中は大勢の人でゴツタがえしていました。

使い捨て時代の今、私たちが気がつき目指すようになったリサイクル・エコ社会とフリーマーケットの原形がここにあったのです。

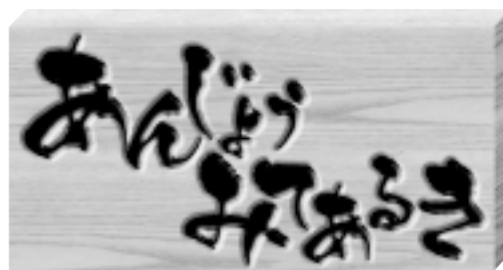
※この花ノ木通りに賛流れ品を売る店が2軒ありましたが、現在も1軒商い中です。

平成十二年三月 花ノ木町内会

花ノ木商店街復興組合



現在の花ノ木商店街



★花ノ木古物セリ市跡
(花ノ木町)

傘屋、乳母車屋、畳屋、酒屋、床屋、菓子屋、質屋……。安城市の中心に位置するこの花ノ木通りは、戦前からこうした店が軒を連ね、また、近くには製糸工場などもあり、とても活気を帯びていました。

そして、この通りの中ほどに、中古の家具、衣料品、机、古靴など身の回りの物を中心に持ち寄って競りに掛ける市場が、昭和の初めから30年ころまで存在していました。

建物はそれほど広くなく、中央に長机が置かれ、両側がひな壇のようなものでできた競り場で、大勢の人が見つ

める中、たくさんのが落札されていきました。

一番高い値を提示した人に購入する権利が与えられ、手数料を払えば誰でも売り買いできるなど、ルールは現在のインターネットを通じてオークションとまったく同じです。

物がなく貧しいくらしを余儀なくされた戦争前後のとき。一方、大量の物があふれ使い捨てが当たり前となった昨今。そんな時代を経て、今再び、あのころの人々の中にすでに宿っていたリサイクルや物を大切にする精神が見直されているのです。



今月の案内人

花ノ木町 杉浦 智さん

その12

花ノ木古物セリ市跡